

初の著書「スポーツの仕事を、学問に変える」を出版 「甲子園など運営現場で流した汗を学問に」



日本大学スポーツ科学部・大学院スポーツ科学研究科准教授

久保 賢志さん

本学卒業生で、日本大学スポーツ科学部准教授の久保賢志さんは8月、初の著書『スポーツの仕事、学問に変える―現場経験から問いを立てるという選択―』（創文企画）を出版した。久保さんは大阪体育大学卒業後、毎日新聞社の事業部員として全国高校駅伝や選抜高校野球の運営現場の実務で汗を流し、その後、働きながら大学院で学び、博士号を取得した。

久保さんは自らを「ハイブリッド研究者」と呼ぶ。スポーツイベントの現場で担当者として奔走した「実務家」と、スポーツマネジメントを学問として分析する「研究者」。二つの視点を持つ強みを生かし、著書では、現場で感じた違和感や葛藤を学問上の「問い」へと変えてきた経緯をつづった。

「目の前のことに泥臭く全力で打ち込む。でも同時に『なぜ』という視点を持つてほしい」。体操競技と勉学に打ち込んだ大阪体育大学時代、新聞社時代、そして研究者としての現在まで、二つの姿勢を貫いてきた久保さんに聞いた。



著書の内容は
実務と研究をどう往復するのかをまとめました。私は自分のことを「ハイブリッド研究者」と呼んでいます。スポーツの現場で感じた違和感や葛藤を、単なる日々の体験や成功談で終わらせず、学問的な「問い」に翻訳していく。著書ではそのプロセスの体系化を目指しました。私は新聞社で働きながら、博士号を取りました。「実務も経験しているけれど、研究もできる」「ハイブリッド」は、その両方を備えた研究者でありたいという意味です。

新聞社時代の経験は研究にどうつながっているか
毎日新聞社では全国高校駅伝競走大会や選抜高校野球大会などに関わりました。例えば高校スポーツには「教育」と「ビジネス」の両方の側面があります。一緒に大会を運営する高野連や高体連の先生方には「高校スポーツは教育の一環だ」という考えが強くあります。新聞社側もその考えは尊重していますが、一方でスポンサーや放映権を守る立場もあり、その間に

なぜ出版しようと思ったのか
社会人大学院生や実務家教員、若手研究者には、自分の現場経験には価値があるはずなのに、「どう研究したらいいのかわからない」という壁にぶつかる場合があります。私自身も仕事をしながら論文を書き、「経験をそのまま書いても研究にはならない」と感じました。その苦労の中で身につけた問いの立て方や、自分なりに実務を学問に「翻訳」した技術が、同じように悩んでいる人たちの参考になればと思います。

なぜ大阪体育大学に進学したのか
小学生のころから体操を続けていて、より高いレベルの環境で競技力を磨きたいと思いました。当時は体育教員になることも考えていました。

ですね。

「泥臭く」と「なぜ」を両方持つてほしい

大阪体育大学の後輩にメッセージを
まず、目の前の現場や競技に泥臭く、全力で打ち込んでほしいと思います。でも同時に、「なぜ」という視点を持ち続けてほしい。周囲の空気に何となく流されていくのではなく、「なぜこうするか」と立ち止まって考える。社会に出れば、自分で考えて行動する力が必要になります。皆さんが現場で汗を流したり、悩んだり、葛藤したりする経験は無駄にはなりません。その泥臭い経験は、必ず自分の武器になります。それを知識や学問に変えていくこともできます。

大体大生には、「泥臭くやり切る」と「なぜ」と考えること。この二つを大事にしてほしいと思います。

間勉強し、2回落ちて、3回目で合格しました。

新聞社ではどんな仕事を

2008年に入社し、最初の3年間は大阪本社の人材総務部。2011年に事業部へ異動し、10年間、スポーツ事業を担当しました。全国高校駅伝はキャップなどとして10年間担当し、選抜高校野球では大会運営のサブキャップとして甲子園球場の大会本部に詰め、開会式で入場行進を先導したこともありました。

スポーツ大会は学校や競技団体、行政、警察、消防、テレビ局、スポンサーなど、多くの関係者との調整で成り立っています。結局、マネジメントは「調整」なんだと思います。それぞれ違う立場の人に意図を理解してもらい、お願いし動いてもらって、一つのものをつくる。その経験は今の研究にも非常に生きています。

なぜ大学院へ

当時は研究者になろうと思っていたわけではなく、新聞社の事業部員として自分の専門性を高めたいというのが一番の理由でした。

スポーツイベントは、私たち事業部員が中心となって運営し、多くの関係者と調整しながら大会全体をマネジメントしていました。ところが、大きな課題が出てくると、大学教員など外部の専門家の意見を聞いて方針を決めることがあふ。現場のことは自分たちが一番分かっているはずなのに、自分たちは専門家とは見られていない。そこに違和感がありましたし、悔しさもありました。

一方で、野球のことは野球の専門家、陸上のは陸上の専門家が決める。自分は競技そのものの専門家にはなれない。それなら、スポーツイベントのマーケティングやマネジメントを学び、「運営の専門家」になれないかと考えました。

また、「研究が実際の現場でどれだけ役に立つのか」と感じることもありました。現場と研究を橋渡しできる存在になれないかという思いもありました。

新聞社で働きながら大学院に通うのは大変ではなかったか

大学時代の競技実績は
けが多かったのですが、関西インカレで団体3位、個人総合7位、新人戦では個人総合3位でした。全日本インカレは当時2部で、団体総合3位が最高成績です。

大体大の4年間で今につながっていることは
「なぜ」と考える癖がついたことです。当時のクラブには、伝統や規律を重視して、与えられたことに従うという雰囲気が強くなりました。でも私は、「なぜこれが必要なんだろう」「本当にこのやり方が一番いいのか」と常に考えていました。先輩からすると生意気だったはず（笑）。

「これは本当に常識なのか」と問い直す視点は、大学生のころから持っていました。それが今の仕事や研究につながっていると思います。また、ゼミでご指導いただいた淵本隆文教授（バイオメカニクス）はどんな時も公平でぶれない先生で、物事の本質を見極める姿勢を学びました。難関の全国紙を受けると話した時も、「難しい」と否定的なことは言わず、可能性は誰にでもあるという姿勢で見守ってくださいました。研究室の近くで新聞社の採用試験の勉強もよくさせてもらいました。

淵本先生から「頑張れ」と言われることもありましたが、それ以上に、先生のそばにいてことで「頑張ることで道は開く」ということを肌で感じていました。

なぜ新聞社を志望したのか

大学では体操部でレギュラーを目指して頑張っていました。けが多かった。プレーする側から、自分がスポーツという舞台をつくる社会に発信する側に回りたいという思いが強くなりました。

特に毎日新聞社は選抜高校野球や全国高校駅伝など、歴史と伝統のあるスポーツイベントを数多く運営していました。スポーツの感動や教育的な価値を広めたい。そして少しカッコよく言えば、「人々の記憶に残る仕事がしたい」と思っていました。

現役では合格できず、就職浪人しました。1年

これから研究者として目指すことは
実務と研究をつなぐ架け橋になることです。そして、次世代のスポーツ界を担う若い人材も育てていきたい。単に理論を知っているだけではなく、現実の課題に気づいて、自分で問いを立て、それを解決できる力を身につけてほしい



ゼミ生とスポーツイベントの現地研究調査